



左から、三起子氏、田中慧社長、社長が前職でスカウトした森嵩臣氏

職人技とされている研磨業界で、システムエンジニア出身である三起ブレード株式会社の田中社長に、入社の際の経緯や職人の技術を細分化する取り組み、人材確保の工夫についてお話を伺いました。

### 社長プロフィール

田中慧（たなかさとし）

1984年生まれ

2019年に社長就任、現在に至る

## 経営者インタビュー【三起ブレード株式会社】

# 「男の世界」と言われている研磨業界に主婦の力で 人材問題を克服する

### 研磨という業務について

**青木：**研磨というと、家庭用の包丁を研ぐ、または表面を磨きこんで鏡のようにするイメージがありますが、御社が行っている研磨について教えてください。

**田中：**一般的な包丁と同様に、企業でも製品を作ったり、加工したりするときにも切断という工程は必ずあるので、裁断するマシンには刃物が最適な状態で付けられているのですが、これらの刃物も家庭用の包丁と同じように使って行くうちに切れ味が鈍くなったり、欠けたりします。よって、刃物も定期的にメンテナンスして切れ味を取り戻す必要があります。これらのサービスを提供するのが当社の業務です。

**青木：**そうなのですね。穴を開けるドリルや機械に取り付ける刃物、機械刃の切れ味を取り戻すことで、最終製品の仕上がりを決めるという重要な工程を支援しているのですね。工業的な刃物と言えば、丸の

こぎりやチェーンソー、包丁以外で馴染みのある刃物は、カッターナイフやハサミですが、機械刃の形状はどのようなものがあるのでしょうか。

**田中：**円形、四角形に留まらず、いびつな形をしたもの、等々世の中で使われている多種多様な形状の機械刃を再研磨しています。例えば、セロハンテープのような粘着テープや紙、フィルム、サランラップ、アルミ箔、鉄、そしてネギや肉等の食品の切断に使用する機械刃の研磨も手掛けています。

**青木：**食品を切断する機械刃もですか。鶏を部位毎に解体する機械というのを見たことがありますが、刃の切れ味は重要ですね。ところで、食品加工用の機械刃の再研磨となると機械加工用の機械刃にない注意点があると思うのですが。

**田中：**食品加工用の機械刃の再研磨にはコツがあって、加工中に刃が欠けて混入すると大きな事故に繋がるため、切れ味を保ちながらも欠け難い研磨を施す職人の勘所はあります。

**青木：**再研磨の依頼を受ける場合には顧客から指示

書や仕様書が来るのでしょうか。

**田中：**仕様書や指示書が来る場合もありますが、「こういうものを切りたい」という相談を受けることも多くあります。切れ味重視ですか、耐久性重視ですか、こうすると欠け難いですよ、等々顧客のリクエストに応えるように、また提案もしています。

**青木：**刃物に関するコンサルテーションもされるのですね。それは凄い。田中社長のノウハウを頼りにしている顧客への提案営業もされていますが、短期間でそれだけの知識を蓄積されたのは凄いですね。

## 沿革について

**青木：**田中社長は2代目ということですが、沖電気のシステムエンジニアから職人技が必要な事業を引継いだ経緯を教えてください。

**田中：**平成4年に先代が独立し、三起ブレードを設立しました。その後先代が急逝したため廃業も考えましたが、一人娘である妻の事業継続の想いに応えるために私が事業を引継ぐ決心をしました。そして、一人だと不可能だと感じていたので仲間を募ったところ、共感してくれた仲間が社員として入社してくれました。しかも、私よりも早く入社して現場の仕事に慣れるようにしてくれました。

**青木：**全く畑違いの業界への転職となったわけですが、結婚後に先代を手伝って技術の修得をされていたのでしょうか。

**田中：**そうですね、結婚後には週末に手伝っていましたが、技術や治具の使い方を習う前に先代が急逝しました。研磨業界の事も全く知らず、手伝っている内容は一部に過ぎなかったため、また研磨機の仕様や治具の使い方を全く知らない状態で引継いで良いものか悩みました。当時は簡単な研磨しかできなかったために、既存顧客にはファックスで状況を連絡して経験のない仕事は断っていました。しかし、どうしても当社に仕事を頼みたいというお客様が多く居ました。何とか対応するなかで、ゼロから研磨機の仕様を調べ、治具を作り、先代が残した治具がこの作業に使えないかとパズルゲームのように組み合わせで何とか対応していました。しかしながら、職人としての技術を見てこなかったのが、先代の

ネットワークや自分が知り合った研磨屋に弟子入りして技術を教わって持って帰るということで対応していました。

**青木：**よく技術を教えてもらえましたね。やはり、先代のネットワークという知的資産が大きかったのでしょうか？

**田中：**私が知り合った研磨屋もありますが、多くは先代のネットワークです。特に、最も多くの技術を教えてくれたのは、私が師匠と呼んでいるのですが、先代が勤めていた会社で一緒に働いていた40代半ばの職人です。師匠は、先代をととても尊敬されていて「先代が亡くなると追い越すことが出来なくなる。だから、俺がお前に技術を教えて、競争して、俺が一番だってことを証明する。」と言って多くの技術を身につけさせてもらいました。先代の知的資産の恩恵をいただきました。

**青木：**その師匠は先代の仕事をご存じなので、残された治具の使い方を教えてもらえたのですか。

**田中：**先代のクセや方式があるので、師匠もわからなかったです。師匠から学んだ技術で当社にある治具を使って研磨することが出来ないため、会社に戻って治具をどの様に使うか、または新しく自作するというのを繰り返しました。治具だけに留まらず、砥石も何千種類もあるため、使う技術もガラリと変える必要があります。そのため、技術の承継は非常に重要です。

**青木：**「この治具を使うためにはこの技術」と一子相伝のような世界ですね。研磨の世界に飛び込んで、その面白さを感じられている根本を見つけられたのかなと推察します。

**田中：**技術の承継については、自分の代で途絶えても良いと考えている職人も多いように感じます。

**青木：**少し話題が逸れますが、令和2年11月4日にYouTubeで開催された関東経済産業局後援の「アトツギベンチャー Meet-UP ! Vol.1 in CHIBA」のトークセッションに登壇されていましたね。テーマは、息子と娘と婿／三者から見た”アトツギあるある”でしたが、いかがでしたか。

**田中：**非常に面白かったのですが、私の場合は娘婿と先代がガチンコでぶつかるというようなことは無

くて参考になるような話は出来なかったような気がします。非常に楽しかったです。

## 人材確保について

**青木：**人材確保についてトークセッションでも他の企業さんが興味を示されてたようでしたが、どのような特徴をお持ちでしょうか。

**田中：**人材が集まらないということは、魅力がないということなので魅力があるように演出しています。研磨の職人は減少しているため、職人を募集しても集まりません。では、職人を育てた場合、その人が高齢になり、また転職して会社を去ってしまうと、また新たに職人を育成しなければならず、育成するためのコストと時間が掛かります。従って、職人を雇うことは選択肢から外すべきと考えました。そこで、女性や主婦の職場進出という外部環境を機会として職人が行ってきた業務を主婦に任せることは合理的だと考え、私のなかで主婦に研磨をしてもらうアイデアが生まれました。ところが、研磨は3Kの職場であり、主婦にとっては魅力がないために研磨業界では主婦が戦力になっていませんでした。そこで、主婦が魅力を感じるように、主婦にフォーカスした会社の仕組みを作ることを考えました。

**青木：**職人の世界に主婦が魅力を感じる会社の仕組みですか。

**田中：**ええ、そうです。主婦は子供の急な発熱、等で直ぐに帰宅しなければならない状況になることがあります。このような理由でまとまった時間で働けなくなることが少なくありません。そこで、当社は突発的な状況にも柔軟に対応できるような勤務体制を取るようになりました。つまり、ドタキャン、ドタ参加を認める勤務体制です。

**青木：**ドタキャンだけではなく、ドタ参加もOKということですか。凄いですね。しかし、シフトがガタガタに崩れると思うのですが、どのような対応をされているのですか。

**田中：**シフトの変更が簡易にできるシステムを自作して対応しています。当然のことながら、給与も1分単位で計算しています。従って、少し早いけれど帰ります、と気兼ねなく言うことができます。この

点は主婦には受け入れられていると思います。

**青木：**シフト管理のソフトを自作されたのですか。社長のIT知識を活用されたのですね。それは凄いですね。

**田中：**帰りたいと思ったその場で、リアルタイムで簡単にスケジュールを組めるアプリですが、システム開発は本職のようなものなので、お手のものですよ（笑）

## ITで主婦力を活用する

**青木：**高齢化による職人の減少に対応するために、主婦に研磨を任せるという取り組みをされていますが、主婦を職人にするという事ではないですよね。

**田中：**そうですね。職人を育てるというつもりはなく「職人の仕事を誰でも出来るように手順化する」ことを行っています。主婦にフォーカスして手順化することで、なるべく主婦が取り組み易くすることを心掛けています。そして、手順に従って作業しているのですから「失敗したとしても手順書が悪い」ということで会社は対応しています。つまり、失敗を個人の責任にしないということが、もう一つの主婦の働きやすい職場を作っているポイントだと思います。

**青木：**手順化するとはどういうことですか。差支えない程度に教えてください。

**田中：**研磨＝職人技と考えるのは、研磨の工程全てに職人技が必要と考えているからです。しかしながら、工程の全てに職人技が必要なのかというと、そんなことはありません。ITエンジニアは手順書を作るのが得意ですからね。

**青木：**そうですね。主婦の活用を支えているのは、ITということですね。

**田中：**それもありますが、研磨という仕事は不可逆な性格を持っており、欠ける、削り過ぎてしまうと元には戻せません。不可逆な失敗のリスクにさらされて、心をすり減らすような作業を含めて請け負っていたのが職人だと思います。職人に頼らないために手順書を作り、治具を使うことで主婦力を活用できるようにしても、失敗することはあります。その時に「何をやっているんだ」と言ってしまうと、職

人としての作業を求めていることになります。当社では、失敗を個人の責任にするのではなく、会社の責任として捉えて手順書の改定や治具の使い方の説明を改善するようにしています。もっとも、手作業なので熟練度は出るのですが（笑）

**青木：**社長のシステム開発の知識を活かしたことは他にありますか。

**田中：**職人技を使わないで誰でもできるようなフレームワークを作って、更に手順書を作るといのは前職のシステムエンジニアの考えそのものなのです。なので、職人が感覚で判断していたことを、インプットすればアウトプットが出るようなアプリを作り、それを手順に組み込むようにしています。それによって、主婦が職人と同様の成果を出せるようにしました。

**青木：**NC 工作機のような感じですね。

**田中：**当社の研磨作業は NC 機を使っていません。NC 機は数値を入れるだけで簡単で早いようなイメージがあると思いますが、実は段取りに非常に時間が掛かります。再研磨の対象は何千種類とあるため、NC 機では対応しきれません、よって、先代が残した原始的なメカニズムの汎用機が重宝しています。機械とデータは繋がっていないのですが、手順書や自作のアプリ、治具、スマホ、パソコンを駆使することでフレームワークを強化し、自動化や職人技に代わるものとしています。

**青木：**そうなのですね。しかし、手仕事となると油で手が汚れたり荒れたりすると思うのですが、定着率はどうですか？

**田中：**おかげさまで、辞めたのはご主人の転勤で引越された方だけです。なので、それなりに気に入ってくれているのかと思っています。また、新規募集すると直ぐに応募があり、働きたいという方には順番待ちしていただいています。

**青木：**その要因は何だとお考えですか？

**田中：**勤務時間がフレキシブルなことと、失敗を会社が全て引き受ける、という方針が受け入れられているのかと思います。それと、他の従業員にも個人の責任にしないようにと言っているのが、人間関係も良くなっているのかなと感じています。

## 知的資産経営

**青木：**お話を伺っていると、先代のネットワークや人望という知的資産が事業を承継して継続する上で役に立ったのだと思われます。そして、御社の知的資産の掘り起こしということで 2019 年に千葉県中小企業診断士協会の知的資産研究会の診断を受けられて、千葉商大の井田毅記念セミナールームで 3 チームのプレゼンを聞いていただきましたが感想をお聞かせください。

**田中：**診断時のインタビューやワークショップを経てプレゼンを聞くことで、経営者とはこういうものなのかと気づきがあり、サラリーマンの経験しかない自分自身が変わったと感じています。自分が考えていたことに言葉を当てはめて教えてもらったので、より理解が深まりました。より深まったことで、新たな悩みが出てくるのですが、自分自身が前進出来て、その時からサラリーマンではなくなったのを実感しています。また、社員やパートの方々と一緒にプレゼンを聞いたことにも価値があったと思います。会社が何をしているのか、会社の理念はどのようなものか、ということ客観的に分析されたものをプレゼンで披露していただいたので、次の日にはパートの方々がグッとヤル気が上がったのが実感できたので大変感動しました。

**青木：**パートの方々は、当たり前だったことが自分たちの強みであり、特に構造資産としてのフレームワークがきちんとしていることに気が付かれたのではないのでしょうか。

## 今後の事業計画

**青木：**御社の今後の事業計画を教えてください。

**田中：**3つ考えています。1つ目は、今の機械刃の再研磨の取り扱いを伸ばすこと。2つ目は、高齢化して跡継ぎ不在の職人の技術を承継することです。単に新しい技術の習得に留めず、今の技術とのシナジー効果を期待しています。3つ目は、研磨に IoT を導入することです。製造現場に IoT を導入することは課題も多いと言われていますが、システムエンジニアの知識を最大限に活用して業務を補助する

# INTERVIEW

アプリやシステムを開発して、顧客と自社の Win-Win を実現して事業を拡大していきたいと考えています。

**青木：**素晴らしいです。アナログな職人の世界にシステムエンジニアの知識と手法を取り入れて女性が

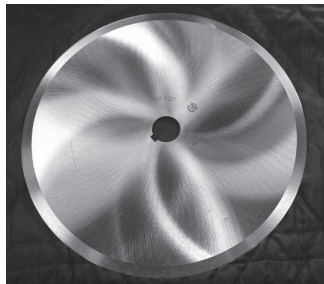
進出できるフレームワークを構築し、職人の減少で困難に直面しているサプライチェーンの持続性確保に向けた取り組みをされるのですね。御社の時代を映した将来計画で、益々の発展を期待しております。本日は、お時間をいただきましてありがとうございました。



作業中の主婦従業員と田中社長



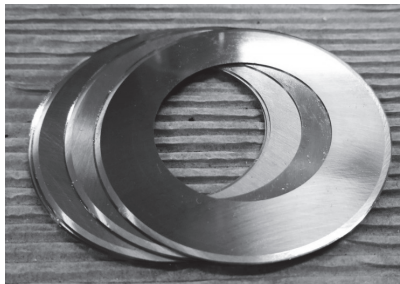
ギャング刃



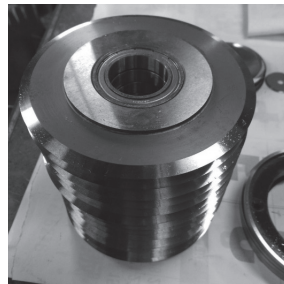
スコア刃



ドリル刃



スコアナイフ



カメロン刃



レーザー刃

## ■会社概要

企業名	三起ブレード株式会社
本社	千葉県市川市大野町4丁目3005-7
資本金	200万円
年商	2,000万円
従業員	10名
代表取締役社長	田中慧
取締役	田中三起子
取締役	笠原千穂美

## ■インタビュー及び原稿執筆

青木靖喜…… 千葉商科大学経済研究所客員研究員  
同大学 非常勤講師 中小企業診断士